

第一章 上京の日まで

1、生い立ち

藤田謙一は明治六年一月五日（一説には明治五年十一月二十八日）弘前市五十石町二十三番地に旧弘前藩士・明石栄吉・との二男として生まれた。兄弟姉妹は七人である。長兄準一、弟桐一、武雄他妹。母ともは藩士佐藤貞助の娘・叔父恭助は県会副議長をつとめる。在宅は浅瀬石村でのち枯木平に移った。明石家は大阪城で豊臣家のために尽した武将明石掃部の末裔の名家。

この明石家も謙一の生まれた頃は維新の変革によって没落し、生垣も人間よりも犬の出入に都合よからうと噂される位に荒れ果てていた。しかし父は毅然として節操を守り、武士の気概を忘れず、幼い謙一達に寒中、雪の積もる庭で素足の撃剣稽古をびしびし仕込み、へとへとになるまで続けた。

やがて五歳の年、近くの親戚の藤田正三郎家に子がなかったので養子となり、明治十二年その家督を相続した。養家の藤田家も裕福でなく、小学校の月謝も払えぬ時もあったと伝えられる。

2、小学生時代

明治十二年七歳で五十石町の自強小学に入学した。学制によって下町には浜の町の啓蒙小学、袋町の幼習小学、新町の篤敬小学、馬屋町の思斉小学、平岡町の童習小学と五つの私立小学が誕生したが

明治十年、啓蒙小学と幼習小学が統合して自彊小学に、篤敬小学、思斉小学、童習小学の三校が統合して博習小学となった。

自彊とは易经からとった語で、天の運行は健やかで一刻も休むことがない、人もそれにならって自ら善をなすように休まず勉め励まなければならない、という意味である。自彊小学の学区は紺屋町、浜の町、五十石町、袋町であり、教室五、教員男五、女一、生徒は男一二一、女四七で授業料があり、下等小学なので修業年限は四年だった。

この自彊小学は謙一が三年生の明治十四年四月十日火災により焼失してしまった。それで生徒は博習小学に依託されたが、下町住民の間からこれを機に両小学を統合し、新たに大規模校を建築しようという声がおこり、明治十六年十月一日城西小学校が誕生した。二階建、十教室、五学級、生徒数二七二名という立派なもので、当時弘前で二階建校舎は朝陽、知類（のちの大成小）の二校だけであった。

藤田は明治十六年この城西小を卒業した。当時は一月から十二月までの年度である。

小学校の思い出の先生に博習の藤田愛之進がある。元氣潑刺たる若い教師で「津軽男子が寒がるとは何事だ！元氣を出せ、元氣を！」と生徒全員を素足で寒中雪合戦をやらせたり、腰まで埋まる雪の中で旗取り競争をさせて一着の生徒に凍豆腐を一つ賞品に与え、それを食べないと真赤になって怒った。

運動が終ると「おい肩を叩け」と生徒に肩を叩かせ、少し強い奴が出ると「ウン、お前は力がある」

と褒めるが、背がヒョロ高いばかりで力のない謙一の番になると「お前は駄目だ、ペケだぞッ」と頭から怒鳴りつけた。謙一が小学二年の年に陽チフスが流行したが七人兄弟のうち謙一ひとりだけが母の実家の浅瀬石に預けられた程大切にされ、また身体が弱かったのであるがこの先生の下で大いに奮奮して相撲をとったりして体を鍛えたがやはり弱虫だった。

しかし学科の方はずん／＼上がり十一歳の明治十六年、城西小学校を五番で卒業した。

3、弘前高等小学校・東奥義塾の頃

明治十七年、どういう事情か中津軽郡公立中学にも東奥義塾にも進学せず、祖父佐藤貞助と叔父恭助の下で十八史略、四書五経を学んだ。翌明治十八年一月大成小学校に併設された高等科に入学、十九年八月同校は法令改正でなくなったが翌二十年一月二十五日、弘前高等小学校が旧時敏小跡、現文化センターに開校されたのでそこに転入した。

大成小学校高等科及び弘前高等小学校時代にはいろいろな話がある。例えば、ここは市内各尋常小学校生徒の集まりだったため小さな閥が出来て、朝陽や時敏や和徳小学校から来た山田金太郎、桑田の赤鬼などという腕力の強い連中が大威張りで城西派の謙一や鹿内元弥少年などはいつもいじめられていた。

ところが翌年になると城西から青沼金蔵、高橋八十太などの腕力家が入学して来たので、謙一らは

大いに勢いづき、虎の威を借る狐の格で「敵を討つなら今だ！」とばかり。元弥少年は十手と煙草入を腰に差して学校へ行き「赤鬼」といわれていた桑田を捉え、喧嘩を売りかけたところ、運悪く先生に見つけられ、兩人とも十手と煙草入を取上げられたが、その煙草入れは親父のものだけに、元弥少年と謙一はその後一週間ばかり毎日青い顔をしていたという珍談も残っている。

それから今でも話題に上るのは当時の中学入学試験問題である。明治二十年一月十五日東奥義塾では郡立中学校からのもらい火で焼失していた校舎の落成式を行った。そしてこの機を生かして高等普通科を新設した。すでに郡立中学校は廃校になり県下に中学校は青森市に青森県尋常中学校が一枚あるのみだった。

このチャンスに謙一や元弥その他二三の少年たちは「我々は相当学問もあり、既に高等小学校も終えたのであるから、中学三年の編入試験を受けようではないか！」ということになり、仲間が集まって盛んに勉強した。ところが国語、作文については誰にも負けないが数学は駄目だった。そこで謙一と元弥は義塾の数学の先生でもある成田彦太郎を訪れ「算術は上下巻のどちらが試験に出ますか！」と聞いた。答えは「そりゃ下巻にきまつてる」二人は一生懸命下巻ばかり勉強していると試験問題は案に相違した上巻から出たので二人とも見事不合格、小学時代五十番だった北上貢（敬造）が合格した。この時謙一は「落第した者はいたし方ないではないか。僕は一年生で我慢するよ」と平気で一年生に入学した。物には順序があり、しかも努力せずして結果を望むことの無謀を知った。

4、青森県庁給仕

謙一の東奥義塾時代は満二ヶ年だった。受験勉強で一年の課程は大抵会得していたので時間ももつた。たいなくまた学資も続かないため、ついに両親に無断で中途退学し、青森県庁の玄関に駆けこみ給仕を志願した。幸い月給六円の青森県庁雇に採用された。

しかし毎日コツコツ働くが知事をはじめ役人の威張るのが癪に障り、そこで「よし俺が今度知事を使う人間になるぞ」と決心し、養家の金百五十円を持出し、県庁にも無断で東京へ出奔した。十八歳である。県庁には一年しか勤めなかったが、この前後三ヶ年が謙一の少年時代を飾る思い出であり、またそれまでの引込み思案から急に開放的に大胆に行動し始めた一大転機であった。

謙一はこの時代から特に好んで歴史物、伝記などを愛読し始めた。英雄伝としては秀吉がたまらなく好きだった。家康の艱難に耐える、忍苦的な努力主義の一生も好きだった。かと思えば維新三傑の西郷・木戸・大久保三人の性格、風貌すべてが彼の気持にピッタリ合うような気がした。

謙一を中心に鳴海堯作・三浦真・鹿内元弥、それに弘前中学の佐藤治六（紅緑）の文学少年が集まって「覚眠社」をつくり、機関誌を発行して氣勢をあげた。当時、謙一は社中随一の文章家であったが、紅緑の大胆な筆致と少年に似あわぬ人心の機微をつかんだ巧みな描写はすでに大いに将来あるものとして期待された。

謙一が東京へ飛び出したのは明治二十四年八月二十四日である。その固い決心はこの後三十年間郷里へ帰らなかったことでも分る。東京に着いたのち神田錦町に友人北上貢を訪ねて世話になった。そこは矢部愛子という三十歳ばかりの美人が経営している下宿屋だった。

第二章 熊野博士書生時代

明治二十四年十月、謙一は明治法律学校（現明治大学）に入学した。幸いにして熊野敬三法学博士の玄関番となったのである。熊野博士は有名な民法典論争をひきおこした民法の起草委員のひとりである。ポアソナードの影響が大きい。厳格そのもの人で博士からうけた感化は偉大であった。謙一は玄関番を兼ねながら通学し、博士へは粉骨碎身して尽し、明治二十七年七月卒業した。成績は優秀であった。

卒業すると同時に、かねての志望通り判事、弁護士試験に応じたがこの年から六課目が十課目になったなどの関係で失敗した。豊かな学資があるわけでない謙一は卒業後に浪人することは許されずなお二年熊野博士の許に厄介になった。しかしこの間において確乎不拔の精神が植えられた。

熊野敬三博士は安政元年十二月二十二日、山口県阿武郡萩松本弘法谷に生る。明治七年司法省法学校卒業、同八年フランスに留学、十年八月バシユリエー卒業、十一年リサンス卒業、十六年七月法律博士の免状を得て十月帰国、帰国後東京法律学校履、司法省参事官、民事法草案編纂委員、代書出願人試験委員、内閣委員、判事登用試験委員、海軍主計学校教授、法律取調報告委員等を歴任し、二十年法学博士の学位を授けられる。二十三年司法省文官普通試験委員任命、十一月奏任官二等上給俸を賜り、大審院判事に補す、その後司法省参事官、帝国議会交渉事務係、代書出願人試験委員、民法商法施行取調委員、判事検事登用第一回試験委員、法典調査会主査委員等になり二十七年六月十三日辞職、弁護士を開業す、二十七年正五位、三十二年十月十六日没。青山墓地に葬る、享年四十六才。（大日本人辞書）

第三章 役人時代

謙一は熊野博士の亡くなる直前まで熊野家の書生をしていたが、三十二年西村陸奥夫に伴なわれ栃木県属となった。官界への第一歩であったが在任八ヶ月で時の知事溝部氏が失脚したので之に殉じ、再び東京へ引き返した。栃木県庁での仕事は兵事係兼学務係で月給は二十円だった。

明治三十二年九月二十六日、大蔵省専売局属となったが曾根荒助大蔵大臣の官房主事長森藤吉郎に愛された。当時タバコ専売制度の案がならんとするの際だったので謙一はその職務を担当し、その関係で長森官房主事の紹介にて曾根大蔵大臣の知人後藤勝造を知った。

長森藤吉郎は佐賀県土族野田素平次男、長森敬斐に養われて帝国大学に入り法学を修め、検事となり東京地方裁判所検事正に進み、法官同盟辞職の際、主謀の責に任じて免職される。明治三十四年大蔵省官房長に任じ桂内閣倒る、に及び辞す。実業界に入り東洋硝子製造株式会社専務取締役となり、のち満韓塩業会社取締役となる。大正九年六月三十日没、享年六十一才。(大日本人名辞書)

日清戦争後、政府は財政増収の必要上、葉タバコ専売の方針をたて、栽培業者の反対を押し切って明治三十一年からこれを実施した。民間製造業者が乱立して激しい販売戦をくりひろげたのはこの頃である。

日本のタバコ王・岩谷天狗堂は大宣伝をして天狗タバコを全国に販売した。日本でPR映画のはじまりは明治三十二年(一八九九)に銀座を背景に撮影された岩谷松平―岩谷天狗堂の「銀座街」とさ

れている。当時もつとも活発な広告・宣伝活動をしていたタバコ商が新しい活動写真を宣伝の媒体としてとりあげたことは高く評価された。

しかし政府の専売制は当時のタバコ製造に家内工業的小生産者が広範に残存し、法をくぐって密造するものが多かったため、収益は所期の目標に達することができなかった。結局、日露戦争がおき、政府は戦費の調達に苦慮し、ここに生産、製造、販売に及ぶいわゆる完全専売制を明治三十七年七月一日から実施して成功したのである。

第四章 神戸鈴木商店グループの実業人として

1、岩谷天狗堂

当時政府は天狗煙草の岩谷商會をはじめとして營業活動をしている煙草會社を安く買取するため盛んに外國煙草と喧嘩をさせた。英米がトラストの形をとるのに対し、日本はバラバラなのでさすがの岩谷商會も没落しそうになった。この時、後藤勝造は藤田の人物、才幹をみて岩谷松平に推挙した。岩谷は一目で彼を懇望し、商會の一切を挙げて彼に委ねることにした。

明治三十四年六月十日、藤田は大藏省を依願退職し、翌三十五年三月岩谷商會に支配人として入社した。月給二百円の藤田は毎日車で商會に乗付け、肩で風を切つて東京市中を四方八方駆け廻つた。そして間もなく岩谷商會を會社組織に変更し、専務取締役となつて英米タバコトラストに対抗し國産品天狗タバコを奨励し大成功を得た。有名な「驚く勿れ、税金千八百万円」という景氣のいい看板をかかげたのは彼の時代であり岩谷の陰に藤田謙一ありとその怪腕は天下に知られた。岩谷松平について次の記述がある。

岩谷松平は薩摩の商人、東京に出て薩摩屋と号し、タバコを売る。のち工場を設けて紙巻タバコ數種を製し、品質最良を誇るの意を以て店頭に天狗面を掲げ、自ら天狗煙草店と称し製する所のタバコに銘を定めて金天狗・銀天狗・赤天狗・白天狗・青天狗と云い、全国に発売す。自ら称す。タバコの輸入を防ぐと。

依て新聞広告及店頭の壁上に書して「国益の親玉」と云い、また「驚く勿れ、税金千八百万円」と云う。店舗を銀座二丁目に置き壁を塗るに赤色を以てし、身外出する毎に赤色の洋服を着、赤色の馬車に乗りて往來す。其他広告の為に手段を尽し方法至らざるなし。衆議院議員選挙の際、自ら候補者となる。得点3点に過ぎず。新聞紙之を評して驚く勿れタツタ3票と云う。また薩摩上布及薩摩紺その他薩摩の産物を郷里より輸入し、之をひさぐ。たま／＼政府タバコ専売の挙あり、松平及び千葉松兵衛らのタバコ工場及店舗を買収す。松平はより府下渋谷に移り、養豚を業とし、また別に店舗を開いて専ら薩摩布類を売る。晩年は日本家畜市場株式会社社長たり。大正九年三月十日没、享年七十二才。子女多し、嫡庶合せて二十余人という。

(大日本人名辞書)

明治三十七年七月、専売制度になって煙草製造販売業岩谷商會は政府に買取されたが商會は高利を得た。日露戦争始まるやわが国の韓国進出を見こし、藤田は岩谷と相謀り、朝鮮に日韓印刷會社を興して各種の良書を出版、世道人心に貢献した。明治四十年十一月から大正六年十二月まで同社の社長となり巨利を博した。

2、名古屋小栗家の整理

明治四十年、名古屋の巨商小栗家及び小栗銀行が破産の悲運に陥つた際、また後藤勝造に招かれて

その建て直しに当たった。すでに小栗の整理については神戸の鈴木商店の総理・金子直吉や逓信省経理局長関宗喜らが前後三年もその整理にたずさわっていたが何れも失敗し、持て余していた。明治四十二年五月藤田は破綻の根本原因である台湾製塩の一手販売を行っていた小栗系の東洋製塩株式会社取締役に就任、常務となって快刀乱麻の大改革を断行、翌四十三年八月同社を台湾塩業株式会社と改称し、専務取締役となって小栗家関係の処理を見事にやりとげ、実業界を驚嘆せしめた。かくて金子直吉と深く知りあった藤田は鈴木王国の参謀となり、鈴木商店東京方面の事業に携わり帝都財界の驍将をもって目せられた。

鈴木商店は大阪の米・雑穀問屋辰巳屋の番頭であった鈴木岩次郎（一八四一―一八九四）がその神戸の出店を譲りうけて明治三年（一八七〇）創設した商店。正式に看板をかかげたのは明治七年（一八七四）に兵庫の弁天浜で砂糖の貿易商「神戸辰巳屋辰（かねたつ）鈴木商店」としてである。のち金子直吉が明治十九年（一八八六）土佐から出て来て丁稚奉公し、この金子の力で「世界の鈴木」になる。金子の前年には辰巳屋恒七の子、柳田富士松が入店し、兄弟番頭として鈴木商店の躍進に貢献した。

岩次郎の死後、妻よねが中心となり、金子、柳田の他に西川文蔵、喜多奈良七らの番頭とともに営業の範囲を拡大し、日清、日露、第一次世界大戦に巨大な利益を得て発展し、日本の商社の元祖とされる。

鈴木商店発展の糸口は金子が台湾総督府の民政長官だった後藤新平に協力して同島における樟脳専

売に努め、明治三十二年同島産樟脳油六十五%の販売権を得たことに始まる。

この後、海外に代理店、支店を設け、砂糖、製鋼業、タバコ、酒類、レザー、セルロイド、製粉、ビールなどの諸工業部門につきつきと進出した。

大正二年（一九一三）、台湾の砂糖、ひいては日本の糖業界支配のため東洋製糖株式会社を直系としたが藤田は同社の取締役として大正十三年まで在任する。

鈴木商店はさらに海運、海上保険、第三国貿易にも進出、第一次世界大戦にはあらゆる重要輸出入商品を取り扱い、神戸本店のほか東京、大阪、横浜、名古屋、下関、札幌、台北、京城などに支店をおき、さらに世界各国の主要地に手を揚げ、大正六年（一九一七）の年商は約十五億四千万円にも達した。この時、三井物産の年商は約十一億円、三菱商事はその翌年に三菱合資から独立するのだった。直系、傍系の関連諸会社も、日本金属、神戸製鋼、帝国人絹、帝国麦酒、帝国汽船、浪華倉庫など六十余社におよび、その資本金総額は五億円といわれた。とくに台湾は鈴木商店のドル箱で台湾銀行は鈴木商店のメイン・バンクとなった。

しかし大正七年の米騒動で神戸本店が焼打ちされ、同年十一月の大戦終結で海運に打撃をうけ、翌年戦後景気に賑わったが九年戦後恐慌によって大打撃をうけた。その後、組織を整え、事業の整備をはかったが、十二年に関東大震災にあい、台湾銀行より二億円余を借りるがなお経営が悪化、昭和元年末には三億五千七百万円の借りとなり、ついに台銀から取引停止となって昭和二年四月二十八日倒産した。しかし翌年三十九名のメンバーによって貿易商社日商が生まれ、今日、日商岩井として業界

第五位の活躍をしている。

鈴木商店と金子直吉については後でまた触れる。

3、東京毛織株式会社

藤田謙一は一代に各種六十余社の社長や取締役をつとめた。このことは年譜をみれば分るがこの特徴は鈴木商店グループの特徴でもあった。その中でもっとも長く任期のあったのは大正元年十一月から昭和二年八月まで十六年間勤めた東京毛織株式会社の取締役、社長の席であり、そして藤田が失脚したのもこの毛織物業界の統合・整理の過程においてであった。それがいわゆる合同毛織事件である。わが国において毛織物業が起こつたのは明治十二年官設「千住製絨所」の創設にある。その後、二、三の民間毛織物会社がおこつたが需要が微々たるため振わなかつた。やがて日清戦争後、神戸の川西清兵衛らが「日本毛織株式会社」を設立して日本の軍需品自給の一翼をにない、日露戦争によって大飛躍をとげた。日露戦争後、ジュータンの大量輸入で業界は不況となり、明治十三年からの老舗、後藤恕作の後藤毛織株式会社が明治四十五年、神戸鈴木商店の系列に入った。そして同年十一月藤田謙一は同社の取締役として入社した。

この頃、羊毛工業界に第一次の合同運動がおきた。ラシヤ市況不振解決のため、東京製絨、東京毛織物、後藤毛織の三社が合同して陸軍の千住製絨所の払い下げをうけ、民間によって軍絨産業を握る

うとすることだった。これは政友会の西園寺内閣の政策に応えた動きでもあった。しかし関西の日本毛織を加えなければ効果なしとして日本毛織に合同話を持ちかけたところ成績良好の同社は合同話に乗らず、合同案は失敗した。

大正三年、藤田は創設者後藤のあとをついで専務取締役となり、鈴木商店の大番頭金子直吉も取締役として直々に登場して来た。そしてついに後藤毛織は大正四年十月社名を東洋毛織株式会社と改めた。

ここで再び三社合同と三度目の千住製絨所の払い下げを大隈内閣に迫ったが、払い下げは陸軍側の反対によって成らず、三社合同のみが大正六年成立、「東京毛織株式会社」の誕生となった。藤田は新会社の取締役となった。

この間の第一次世界大戦中、毛織物業界も大好況となり、製品は飛ぶように売れた。藤田は大正七年、泉尾綿毛織株式会社の取締役となり、同年十二月二十五日に同社を東京毛織株式会社に合併した。東京毛織株式会社は始め大倉喜八郎が相談役、専務取締役は諸井恒平で出発したが、一年後の大正七年六月二十四日、藤田が専務となり、まもなく社長となって昭和二年まで在職した。同社は好景気によって大正八年、資本金を二千万円に増額し、大正九年には技師を欧米に派遣して設備の大拡充をはかり、国際的大躍進に乗り出そうとした時に戦後恐慌に直面した。

かくて大正十一年、不振の東京毛織株式会社が好況の日本毛織株式会社に合併する話が工業倶楽部幹旋で持ち上がった。この時、日本毛織側は積極的だったが東京毛織側は財産目録、バランスシート

の提出をせず不調に終わった。しかし昭和二年モスリン紡績株式会社と東京毛織は合併し、「合同毛織株式会社」を設立、藤田は相談役となった。昭和四年三たび、四たびの毛織業界の合同話が起こった。経済界は不況に悩み、とくにモスリン業界は不振のどん底にあり、合同毛織、東京モスリン、東洋モスリンの三社が倒産状態となって日本毛織に救援を求めたのだった。しかし合同毛織の重役は自社の負債の負担を逃げたので合併は不成立となった。この時、株式比率は日毛一株に対し、合同毛織十株だった。合毛は結局新会社、新興毛織株式会社として更生することとなった。東洋モスリン会社も不良資産と巨額の負債で倒れ、社債を半額、資本金も十分の一以下に切捨てて新株を発行し、日本毛織のテコ入れで第二東洋モスリン会社となって再出発した。

業界はこの後も浜口内閣の産業合理化政策、中島久万吉による四毛織会社の大合同案、さらに日毛の川西社長による共同販売会社設立案などが提唱され、大きくゆれ動いた。この動乱期に藤田は暗躍をこととしていたため、のちに背任の罪に問われ、昭和大疑獄事件の主魁の一人とされたのである。後年藤田はどんな事業をしてもいいが毛織物業界だけは駄目だといった。

ともあれ、多種多様の事業に八面六臂の活躍をし、一日三時間か四時間しか睡眠をとらず、なお精気満々たる藤田の姿を人々は畏怖の念をもって眺めた。

ゼンマイの服地く津軽特産振興

郷土史家の小館衷三氏は母方の関係で藤田謙一氏の生家明石家と縁戚である。それで小学校入学の

時、藤田謙一氏からゼンマイ織りの服地をプレゼントされ、半ズボンの洋服姿で朝陽校に通った。大正末年のことで隣近所皆着物だったので目立ったし、またおもしろしのアクシデントがあって一層記憶が鮮明であると笑っていた。記憶では枯木平の藤田農牧場の人たちにゼンマイの綿毛を採集させて織ったという。藤田氏が毛織業界の雄だったということを聞いて思い出したと筆者に話した。

ゼンマイ織はゼンマイ及ヤマドリゼンマイの若葉の綿毛に木綿繊維を混じた糸を緯(よこ)糸とし、綿糸を経(たて)として織った織物。防水性に富み、雨合羽に多く用いる。山形、秋田、青森が特産地。民芸研究家の相馬貞三氏の話では以前、土手町の葛西織物部で昭和十四年頃から終戦後まで製造していたとのことなので、当主葛西慎一郎氏に尋ねたところ、平賀の大川亮氏のすすめで祖父右平がホームズパンらと一緒に企業化したとのことである。また防水性、雨合羽の件は一寸首をかしげられ、洒落たコートだったと話された。多分藤田氏は中央で糸にし、津軽では手織でなかったという。

ともあれ藤田謙一は郷土の特産物の企業化を大正時代に試みたのだろう。その後折悪しく不況が続きその願いはかなえられなかったのである。

4、日本活動写真株式会社

藤田謙一は大正二年三月、創立間もない日本活動写真株式会社の相談役となった。同社は大正元年九月十日、映画興行界の四社が合同して創立され、日露戦争後の不況で財界が沈滞していたので大い

に期待され、人気を呼んだ。しかし商社買収に金がかかり過ぎて、社長や中心人物が相ついで辞任するという荊の道を歩まねばならなかった。この時に筆頭取締役後藤勝造に頼まれて藤田は相談役に就任、そして大正二年十二月、全重役辞任という事態に立ちいたった時に新経営陣の中で取締役となった。

この映画会社経営が如何に困難なものであったかは次のエピソードで分る。

この会社は、発足早々、不景気と、合併した各社出身者たちの間の不統一から経営困難におちいたが、そのうえ、映画産業の将来性に注目して重役陣に参加した財界の有力者たちにも見放されるといふ事態にぶつかった。「日活にとって大なる不仕合せの日が来た。それは最初の重役会の席上、郷誠之助氏、後藤勝造氏その他の一流の実業家連中と活動屋畑から来た四商社の連中との間に、余りにかけ離れ過ぎた人柄の相違があつたことである。活動屋畑の人達が不徳義極まる無責任なことを平然と述べ立てるので、あの人達は人間でない、と郷さんを始め大部分の人たちが憤然として持株を売払つて日活から手を引いてしまったことである。」(田中栄三「映画史覚えがき」)

後藤と藤田の關係の深さは前述の通りである。以下「日活五十年史」によると藤田謙一の活躍は次の通りである。

大正二年九月に重役総辞職という会社の初の苦境時代に逢着した日活は翌三年二月本社を京橋区上槇町一番地に移したが、藤田謙一は社内の大整理を断行すると共に、資本金を一千万円から払込相当額の二五〇万円に減資を断行、八月一日をもってその公告を終わった。大正三年十月、浅草三友館で

封切られた「カチューシャ」は当時流行したカチューシャの唄を興行中に歌わせたのが大当りをと、つづいて「後のカチューシャ」、「復活」を発表して都合十六万円の収入をあげ、向島開所以来の凱歌となった。京都の尾上松之助の映画も牧野省三の無駄のない演出で軽妙な立回りと忍術その他のトリックが全国的な人気を集めた。しかし日活本社の経営は弱体であった。大正六年の映画常設館は全国で三三九館、うち日活一七七館、天活八〇館、小林商会六八館その他だった。

この頃、弁士廃止の世論が強くなり、日活も大正十年第三部というのを組織して声色なしの映画をとった。日本映画の発展を阻害したものの一つに活弁があった。しかし活弁や女形などの反撃も強く、興行の安定を第一とする日活の経営陣はなか／＼変更出来なかった。もつとも日活向島撮影所ではすでに大正七年、山本嘉一の「生ける屍」に代表される革新映画が誕生していた。また天活では帰山教正が大正七年「生の輝き」、そして八年「深山の乙女」を製作し、日本の映画史上の金字塔といわれる。

一方歌舞伎興行界の松竹も映画事業に乗り出して来た。松竹は撮影所より先に俳優学校を作り、小山内薫が校長だった。

かくて日活は女優を出演させる第三部を作り酒井米子などを採用した。従来の女形は他社に移り、さらに岡田嘉子、夏川静江ら加わり、監督に溝口健二があらわれる。

第一次世界大戦は好況時代をうみ、日活は空前の利益をあげた。大正五年は下期だけで直営興行収入四十万三千円、歩合及び特約興行収入三十五万円という新記録を樹立し、八年上期は直営館のみで

百万円台にのせ、歩合、特約は七十六万円となった。大正八年の配当率は四割、株は額面五十円が二〇四円となり、資本金を二五〇万円から一挙に六〇〇万円に増資した。第一次大戦後、戦後恐慌がおきたが興行界はなお繁栄し、九年下期の総収入は三〇〇余万円という空前の増加をみた。この機会に第四代社長藤田謙一は日活の癌と目された四派の派閥解消と機構の統合に意を用いて成功した。そしてさらに二〇〇万円の社債を発行して東京駅北側の丸の内に映画の殿堂と文化機関を建設する計画をたて、地下工事に着工した。しかし天なる哉、命なる哉、大正十二年九月一日昼の関東大震災によって挫折の止むなきに至った。

震災で日活は本社と直営館十六館、フィルム二十万フィートを失った。損害約一二〇万円だった。ところが焼け残った向島撮影所が震災のエピソードを編集し、また京都の撮影所が健闘した結果、震災後三ヶ月で一八万円の収入をあげた。京都には大河内伝次郎、阿部五郎というスターが生まれた。そして昭和二年、大將軍撮影所から太秦に近代的撮影所を建設して日活映画を不動ならしめた。かく藤田は五代社長のいすを横田永之助に譲って東商会頭となった。

しかし日活創立者でもあった横田は経営者陣に対立抗争をもちこみ、藤田派を切ったが赤字を出して退き、六代社長は中谷貞頼となった。中谷は積極経営につとめたが失敗し、相談役福田英助に攻撃されて全重役を解任して日活は大きく動揺する。この問題をのちの日活社長堀久作に語らしめよう。ここでも藤田謙一は偉大な調停者の役割を果たしている。

「私が日活の取締役になったのは、昭和十年の三月であったが、日活と関係が生じたのは、松方乙彦

氏が第七代の日活社長に就任した昭和九年十二月からであった。

松方氏は、それまで映画界には何の關係もなかった。前社長の中谷貞頼氏が、当時日活の大株主でありまた有力な債権者の一人であった福田英助氏（都新聞社長、現在の東京新聞）との間に、日本劇場（有楽町日劇）を日活に合併するという問題に絡んで大紛争を惹きおこし、この紛争は日を経るに従っていよいよ激烈となり、ついには日活自体の存立さえ危くするまでに至ったので、藤田謙一氏が仲裁に入り、中谷氏には手厚い方法を講じて円満退職を計り、その後任として松方氏を推挙したのであった。

この中谷、福田両氏の紛争はなかなか複雑を極めていた。福田氏一派の重役が、中谷社長が日劇合併に失敗したとの理由に、詰腹的辞任に迫らんとする気構えを持っていることを、早くも察知した中谷氏は、先手を打って昭和九年九月の定時株主総会に、一株主より、中谷社長を除く全重役の解任を求むという緊急動議を提出せしめた。そして議長たる中谷氏はこれを採用して、自身を除く全重役を解任し、その後任重役を全て社員中より銓衡するという前代未聞の総会を強行した。そこで解任された重役は、違法に基く解任であるとの理由で、裁判所に株主総会決議無効の訴訟を提起し、同時に新任の社員重役に対しても職務執行停止の仮処分を申請したところ、裁判所はその理由ありと認め、新任重役の職務執行停止の仮処分を決定すると同時に、先に解任された重役にその代行を命じた。中谷氏と福田氏一派の葛藤はいよいよ紛糾した。社内には二つの重役陣が対立して事務の決裁を求めんとする社員を惑わし、その結果事務は渋滞し、事務の渋滞は製作面に支障をきたし、営業収入は著しく

減少するに至った。藤田氏の仲裁がなかったら、日活は危く崩壊するところであつたのである。」

(日活五十年史)

日活がこの時破産し、映画史から消滅していたら、われ／＼の人生に石原裕次郎も小林旭も浅岡ルリ子も吉永小百合もおらず、若き溢れる戦後世代の太陽族映画もなかつたらう。

5、藤田流社員管理

弘前商工会議所で発行した「弘前商工雑誌第2巻」第1号(昭和三年)に「商傑藤田謙一氏」の一記事が載っている。それは以前どこの雑誌に発表したものを再録したものであるが藤田の実業界での成功の一因を示すのでそのまま掲載したい。

「活版刷の文句のようであるが、世の中は万事誠心誠意を以て遣らなければ決して美しい結果を得るものでないと我輩は確信している。

然しながら、世路は複雑多端であるから、人情の機微にも通ぜざる独り合点の誠心誠意を一概にふり回しても駄目である。そこに誠心誠意を完全に遂行すべき世渡りの技術と云つたようなことが必要となる。

例えば十円出しても他人の気持を悪くさせる者がある。たった五円でも相手を心から喜ばせる者がある。支える人の親切な心に変りがないが、遣り方の巧拙に依つてそういう正反対の現象が起る。畢

竟するに人間は感情の動物である。些細な感情の波に依つて左右に動揺する。

ゆえに世の中を渡るには第一にこの感情の波の動き方を研究せねばならぬ。人間の呼吸に通ぜねばならぬ。我輩は目下、世間からポロ会社整理専門の如くに見られている。

我輩のポロ会社整理法の第一は先づ自分の給料を辞退する事である。勿論賞与なんかピタ一文貰わない。余分の金があつたら全部社員に分けてやる。

この方法は幾分なりとも、会社の財政に息を付かせる効があるが、我輩のねらうところは精神的利益である。社長が無給無賞与で働いているという一篇の事實は、ドレ丈け全従業員の士気を緊張せしめ、整理緊縮の大鈍を樂々と振わせるか測り知れないのである。

我輩の関係工場には減多に争議が起こらない。『どうして、さよう穏かなのですか』と訊ねる人がある。秘訣は簡単である。それは少額なりとも毎年欠かさず給料を上げて行くからである。

滔々たる労働運動の激浪に、我輩の関係工場だけが特別に取り残される筈がない。随分内部に不満が有することがあり、時々ゴタ／＼が起こりそうになる。あそこの隅に三、四人、ここの隅に五、六人ゴソ／＼と語り合っている。このゴソコソ話が容易ならぬ。ゴタ／＼の前兆がある。故に我輩はこれを発見すると、直ちに部下に命じて不平の原因と従業員の希望する処を調査させ、その言い分に相当の理由ありと認めるや即日一斉に給料を値上げするのである。

もとより多額の値上げは行わぬ。先方の要求一円見当の時は先づ三分の一の三十銭位の増給即行する。しかし人間の感情は妙なもので表立った大騒ぎにならぬ内に、此方から先手を打つと三分の一の

増給でその場は円満に納まるのである。

そうして其後も絶えず従業員の動静に注意している。一年ばかり経って亦コソ／＼話が始めるとまた三分の一上げる。亦怪しくなると亦上げる。ところが工場によると平素傲然として職工に臨み、彼らの不平進言なんかには更に耳を傾けないが、一度ストライキが起ると周章狼狽、一挙にして一円、二円の多額の増俸を承認せざるを得なくなるところがある。

要するに我輩は、他の工場で三年に一回で一円上げる処を三度に分けて毎年三十銭上げて行く方針である。結局、増給額に於ては大差ないが、お蔭でもって我輩の工場にはストライキが起こらぬ。

工場というものは年中廻って監督してはいかん。年中廻っていると、細い処が眼に付き過ぎる。大局の利害を判別する力が薄くなる。我輩は時々見廻る。時々廻ると妙に悪い処ばかり発見する。大浦兼武は警視總監時代に突如として朝早く各警察署を歴訪し、署長を驚かしたという話がある。

工場を見廻る時は胸を反らし、慈父の如き温顔を以て、工場の通路の中央を真直向いて歩いて行く。探るような眼付をして、あちらこちらを振り向くような真似はやらない。それでいて、あの職工は今までポカンとしていたな、あれは何か物を喰っていたに違いない、あわてて口をこすつたな。あれは女工の手を引張っていたらしい、油断がならん。チャンと斯う云う風に判るのである。

どうして判るかと言つと、悪い事をした者は何となく態度がソワ／＼している。それから上目を使う。俯きながらチーツと上目を使ってこちらを見送る。この上目をツカうという事は、必ず腹に疚しい処がある証拠だ。しかし其場は知らん顔をして通り過ぎ、事務室に戻って工場長にウント注意する

のである。

これは人事の一例であるが、設備経営の方面もその通り。工場は時々見廻るべきものだ。

我輩の処には従業員から色々な投書が舞いこんで来る。この投書に深い注意を払っている。尤も数多い中には嘘の投書、中傷の投書も少くない。しかしそう云うものは大概判断が付く。

我輩は従業員の投書に依つて間接的に工場を監督する。例えば男工の何某と女工の誰さんが怪しいという投書が来たとする。これは真実らしいと思つてもすぐには問題にしない。一ヶ月ばかり経つて空然工場に行く。そして何も知らん風で工場長に『君、この頃は変つた事がないかね』と鎌をかける。始めは『イヤ何もありません』と胡魔化しているが、段々問い詰めて行くと、是非なく『実はかくかくの事件がありました、男工一人辞めさせました』とヘシ隠そうとした事件を白状に及ぶ。

工場に隠し事は一切禁物である。まして人間一人の進退は事小に以て、さに非ず、我輩は工場長に向つて何故事件を隠蔽せんと企てたか。何故直ちに拙者に報告しなかつたかという事を嚴重に詰問するのである。

ゆえに気の利いた人間になると此方から詰問されない前に我輩の顔を見ると、先方から『実は御報告が遅れましたが、此の間、かくかくの事がございまして』と一切申し立てる。こうならなければいけぬ。隠し事があるようでは本当の仕事は出来るものではない。

我輩は嘘は大嫌いである。嘘を吐くほど卑しむべきことはなく、嘘ほど仕事の遂行を妨害し、混乱させるものはないと思つている。ゆえに我輩は従業員が嘘を吐いたことを発見すると真赤になって怒

鳴り付けるのである。それがドンナ些細な嘘であっても決して容赦はしない。誰が詫に入っても断じて許さない。そして『さっさと進退伺を出し給え』と、兎も角、進退伺をとってしまふ。その後、考へて見て、その人間が平素真面目な男だが一寸した出来心で嘘を吐いたと分ればその日の内に辞表を却下し、将来を戒めて一切を水に流すのである。

すると工場長や課長連の中には、そう直ぐ辞表を下げたのでは効き目が薄いなんていう者もあるが、これは大きな心得違いである。人間は本当の事をいわれても腹が立つものだ。満面のアバタでも、このアバタ野郎と罵られ『成程、本当の事だ』と澄ましている者があるか。たとえ、自分が間違つた事をしたとしても真正面から怒鳴られて、おまけに進退伺を取上げた俣では誰だって愉快でない。その不愉快な気持で働いてはロクな仕事は出来ない。ゆえに断然、辞職して貰う場合は格別、しからざる限りは一刻も早く辞表を却下し不愉快な感情はサラリと流して終つた方が賢明である。

しかし、十人に一人位ツムジ曲りの人間がある。工場長が進退伺を戻しても周囲の思惑を計つたりして容易にそれを受けとらない。そういう場合には我輩が自ら出掛けて行き『いや、先刻のは俺も少々興奮し過ぎたようだ。カンベンして呉れ給え』と心から頭を下げた頼む。いやしくも人間の形をしたものならばこうまで云われて動かない事はない。

我輩が怒鳴るのはその人を憎むためでない。縁あって同じ工場の飯を喰っている以上は、何処までも一緒に相扶けて仲良く働きたい。我輩はそういう心情は人一倍強い方である。それだけに、大嫌いな嘘を吐いたとなると、身内から泥棒でも出たように、驚駭もし、憤慨もする。我輩の怒鳴るのは真

剣である。

社員の出勤が一体に遅くなった時には、黙って自分が早朝から出勤する。そして給仕を呼んで『誰々サンは未だ来ないかね。誰々サンも来ないかね』と態々聞いて見る。給仕から、遅れた連中に、そつと此事が耳打ちされるのは勿論である。『オヤジ近頃早いぜ』と評判が立つと、自然と社員が精励になる。

こんなような事は藤田の名案でも何でも無い。人を率いるに言を以てせず行を以てすべしとチャンと古人が喝破している。世の中の事は簡単である。何事も、平凡な道理を実行さえすれば間違いない。」

第五章 東商ならびに日商会頭として

1、東京商工会議所

日本の商工会議所は明治初年に自治的な商法会議所として結成され、明治三十五年、商業會議所令が施行されて公法人となり、昭和二年（一九二七）、商工会議所法で名称も変り市を単位とする強制加入となった。藤田はこの制度の変遷期の会頭だった。

藤田が第五代会頭に就任する時の会頭人事は波乱にみちていた。それは第三代会頭藤山雷太に対する反対派が存在したからである。藤山は日本の資本主義開花期に活躍した財界の巨頭で藤山コンツェルンの基礎を築いた人物である。佐賀県出身で県会議長をしたのち福沢諭吉の紹介で三井銀行に入り、中上川彦次郎の下で芝浦製作所たて直しや王子製紙会社の乗っ取りに活躍、その辣腕ぶり、攻撃性、経済合理主義には年功序列意識も官憲に対する畏怖心もなかった。

三井と訣別してから不遇が重なったが明治四十年、渋沢栄一が大日本製糖の再建に彼を起用した。かつて藤山は渋沢の王子製紙を乗っ取った仲だった。またかつて自邸を差し押さえられた桂太郎も藤山に協力したという。峻烈な人柄の故、多くの敵をつくったが敵も彼の力を評価した。

この藤山ゆえ、東商三代会頭就任に際しては激しい抗争を生んだ。藤山との決戦投票に破れた大橋新太郎は東商と対立する「日本工業倶楽部」に走った。この頃の実業界の大物の対立について池田成彬は「故人今人」の中で小汀利得に次のように語っている。

池田 藤山が会議所会頭になった頃の実業界の中心は会議所ではなく、工業倶楽部に移っていて、これは和田豊治が中心、それに大橋新太郎が脇役、銀行から井上準之助が援助しており、郷誠之助も入っている。この四人が重立った者です。この連中と藤山が合わない。藤山は何しろ商工会議所という公機関を持っており、これは常に政府の諮問を受けたりしているので一廉の見識を持っておる。一方和田一派は商工会議所なんて中小企業の集団であり、会員の素質もよくない、実業界の中心はここだぞと言っておるので両者は相容れないのです。これはどうも藤山というものが一つ離れて別天地をなしておるからというばかりでなしに、お互いの肌合いが合わないのですね。和田でも郷でも藤山が好きでなかった。大橋もよくない。井上はああいう才子だから大した意味はなかったが……。両者はとにかくそりが合わなかったので、商工会議所と工業倶楽部とは協同して行くということがしまいまでなかったようです。藤山は何か一敵国をなしているというような風でした。

小汀 郷さんが会議所の会頭をやった藤山さんが追い出されたことがあります。藤山さんは大正四年に副会頭、同六年に会頭になっていたのが、同十一年三月の改選で藤山は一票の差で落選し郷が当選した。もっともこれは、藤田謙一に担がれたので、承諾しないで、指田義雄が出たが、間もなく郷が会頭になっている。会議所会頭は初代渋沢栄一、二代中野武堂、三代藤山、四代指田、五代藤田、六代郷です。

昭和五十三年三月、商工会議所制度発足百周年記念の特集が日本経済新聞で生まれ「東商人物一〇

○年史」が連載になった。三月七日はその第六回でここに藤田謙一が登場してくる。前任者の指田会頭が病いのためわずか一年で去ったので後を引き継いだのである。

「こうして大正十五年七月会頭の座を引き継いだのは藤田謙一である。彼もまた鈴木商店を振り出しに、東京毛織社長など実業界にひろく活躍の場をもったが、昭和四年には『売敷事件』（賞勲局総裁天岡直嘉をめぐって起こった汚職事件）に連座し、東商会頭の座を去る、という波乱の実業人であった。青森県に生まれ、明治二十七年、明治法律学校を卒業して大蔵省に入り、その後実業界に転じ、貴族院議員にもなった。その生涯において石油、ゴム、保険、毛織、ガス、鉄道、鉱山、印刷、船舶、セメント、石炭……ありとあらゆる事業に手を出したことで世間に知られた。

五代会頭、藤田謙一の時代に特筆すべき出来事が二つある。

第一は藤田会頭の下ではじめて、『実力専務理事』が登用され、会頭―専務理事による会議所運営のルールがしかれたことである。藤田は会頭に就任すると、自分を補佐して会議所の業務に専任できる人物を求め、人を介して当時東大教授だった渡辺鉄蔵（法博）に会い、東商書記長（現在の専務理事）に就任してくれるように頼みこんだものである。

書記長を応諾した渡辺は大正十五年から昭和九年まで、つまり藤田につづく六代会頭郷誠之助の下でも実力専務理事として才腕を振るうことになる。渡辺はその後、昭和恐慌下いわゆる『商権擁護運動』を展開し、中小商工業者の利益を守る運動を指導して名を挙げた。

藤田の功績の第二は、昭和二年の『商工会議所法』の公布、翌三年の施行、そして『商工会議所』

の名称変更である。それまでの『東京商業會議所』は昭和三年一月をもって『東京商工会議所』となった。

これによって東商はひろく商工業界を代表する総合経済団体となり、同時に全国組織として『日本商工会議所』も誕生した。東商の政治経済界における地位と発言権は一段と高まった。東商内部の組織機構もこれを機に大幅に改められ、會議所は以後、法人企業、個人企業を二本柱としつつ、経済全般の世論反映とその統合に乗り出していく。

五代会頭、藤田謙一の時代は、そうした次の充実期へ向かう橋渡しの時期に当たっていた。」

渡辺鉄蔵は東商広報紙、昭和28年8月号にさらに藤田の業績について次のようにのべている。

「藤田君には日本商工会議所の創立、国際労働會議へ派遣する使用者代表の選定権の獲得、昭和二年の金融恐慌の際の銀行救済樹立、産業合理化運動その他会頭として商工会議所の機能を充分發揮せしめた功績は之を没することは出来ないが、なお昭和三年商法改正論が起こった際、東商に商事法規改正準備委員会を設け、阪谷芳郎男爵を会長とし、法学博士松本烝治を副会長とし、法学博士田中耕太郎を主査として、研究を開始し、商法の専門学者及び経済各方面の専門家を集め、巨額の費用を投じて商法改正の原案を作成した。政府の法制審議會はこの原案をそのまま採用して審議し、議會も亦この案を採用して昭和十三年改正商法の制定を見るにいたったのである。この功績だけでも藤田謙一君が勲三等を授けられて不思議はないと思われるものであるが、藤田君が勲章疑獄に連座したことは、政治的活動の好きな藤田君の何らかの行動が或は禍をしたかも知れない。」

2、渡辺書記長の登用

前述のように藤田東商会頭の最大功績が東京帝国大学の教授を書記長にすえたことにあるのは衆目の一致するところである。商工会議所が中小企業の集まりとやや軽んぜられた時代に大きな区切りがつけられた。そしてこの藤田、渡辺の強力コンビは昭和初期の経済的大動乱期に日本経済の舵をとった。本書は貴重な渡辺氏の論稿をそのまま載せて藤田の経済人としての真随や秘話に触れたい。

藤田謙一氏の日本の経済界に対する功績を思う

渡 辺 銈 蔵

(日本商工会議所専務理事・東宝会長)

大学時代の環境 私は明治四十三年七月東大法科大学の政治学科を首席で卒業して明治天皇から銀時計を拝授し、時の大蔵次官若槻礼次郎氏のすすめで大蔵省に入ることになっていた。しかるに東大の浜尾新総長から呼び出されて商業学科を新設する故大学の教職に残れと言われたので、お話に従った。そしてその翌月文部省から英独自三国に商事経営研究のため留学を命ぜられた。三年の留学を終えて大正三年帰国すると直ちに東大法学部の助教授に任命され、商事経営学、工場経営論、経済政策等を講義しておったが大正六年教授に任命され、大正八年法科大学から経済

学部が独立するや私は経済学部の教授となり、商業学部の主任の役をしておった。

然るに経済学科独立の際に「経済学研究」という機関紙が発行されることになった。私の留学の留守中に大内兵衛君と森戸辰男君が経済学部の助教授に任命されておった。大内君が「経済学研究」の編集主任となっておったが、森戸君がこの雑誌にソ連のクロポトキンの無政府共産主義の実現を主張する論文を翻訳して載せた。この論文の終りに森戸君が自己の結論を数行ほど付け加えた。それは「卑近なる手段を用いて、日常それを実現することに努力せねばならぬ。」というのである。この結論は直ちに貴族院で大問題となり、東大でも文学部を始め、各学部や、山川総長も憂慮しておった。遂に内務省、司法省の問題となり、雑誌は発売禁止となり発行所有斐閣より二、三日の間に回収され、森戸君は助教授を辞任、起訴されて朝憲紊乱の罪に座した。

此出来事は経済学部の教授間の分裂を来し、学生間に「東大新人会」が生れ、森戸擁護の流れが生れた。森戸論文そのものを読んだ学生は極めて少ないと思うが、大正十三、四年頃は森戸擁護で東大生が赤化し、学生の母親が我々教授の私邸を訪ねて、子供が道楽しても已むを得ませんが、赤になっては一生をつぶしますから、どうか説諭して下さいと頼みに来る有様であった。

その頃経済学部の若手教授、助教授等は多く大内、森戸の一派に組しておったが、私は元来マルクス学説を蔑視し、森戸論文をよくもこんな馬鹿気たことが書いたものと甚しく軽蔑しておった故、私は漸次私の尊敬する諸先輩教授とこの左傾若手教授、助教授の間にあつて孤立し、将来を考えれば不愉快の念を生じておった。

藤田謙一会頭の東京商工会議所へ転入の由来 大正十五年の夏の始め東大の卒業生大竹鳳一郎

君が藤田謙一氏の手紙を持参して、私を訪ね東京商工会議所の書記長に就任するよう依頼した。私は大学教授の職が最もふさわしいと考え、かつ東大及び先輩教授に対する責任をも考えて転職を固辞した。しかし藤田氏は再三に亘り東商の現在と将来の仕事の重要性を説いて、熱心に私の就任を希望した。ついに私は先輩の意見を求めることとし、折柄夏休暇で避暑地に居られる大橋新太郎、阪谷芳郎、井上準之助の三先輩を訪ねることにした。最初に神奈川の金沢に居られる、私の大学生時代の保証人であった大橋新太郎氏を訪ねて意見を求めたが、大橋氏は会議所は人事が複雑だから止めた方がよいと言われた。念のため大磯に阪谷芳郎男爵と御殿場に井上準之助氏を訪ねて意見を乞うた処結局、君はもう大学で十三年も講義をしている。日本の経済界はこれから君のような人が実世界で活動して貰う必要があると説かれた。それで私は会議所に行くことを決意し、東大の先輩教授、及び折柄千葉県一の宮に居られた古在由直総長を訪ねてその承認を求めて、東商に移ったのである。

東京商工会議所会頭としての藤田謙一氏の活動 私が東商書記長に就任した際最初に着手せねばならなかったことは事務局が定塚、依田の二派に対立しておったことを統一親和せしめることであり、次に会議所議員が前の藤山派と新たな藤田氏と対立しておったことを藤田会頭が熱心に親和せしめようと工作することを手伝うことであった。この仕事は藤田会頭が強く私を信任されたことと、藤田氏の熱誠をこめた議員及び役員に対する親睦政策と適材適所主義によって短時日

の間に成功し、会議所は一体となって活動ができるようになった。

昭和二年四月四日新に商工会議所法が公布されたが、その二週間後に台湾銀行が休業し、全国の銀行に波及し未曾有の金融大恐慌が出現した。それは震災手形の処理問題が発火点となったのである。この際会議所は一体となって財界安定に関する各種の決議を行い、政府、政党と連繫して大活動を行った。

米国の大恐慌と日本の金解禁 昭和四年秋に米国の株式暴落を発端として起った大恐慌は全世界に拡大し史上最大の経済恐慌に発展した。米国は第一次大戦後世界最大の資本主義国となったが、生産の飛躍的増進に拘らず、世界的な購買力がこれに伴わず、生産過剰と、消費過少が深刻な世界空前の恐慌を起したのである。この恐慌は工業国と農業国と植民地とを問わず世界各国をその渦中に巻きこんだのである。そしてこの恐慌は一九二九年から一九三三年まで四年以上もその勢を逞しくした。この間米国の輸出は三分の一に、英国の輸出は四分の一まで激減したこともあるほどであった。

ところで折りしも日本では昭和三年十月東京商工会議所の提案に基づいて日本商工会議所の常議員会は「……戦後の海外諸国は貨幣制度も安定し殆んど皆金輸出禁止を解除するに至った、わが国民経済の基礎を強固にするために政府は金輸出禁止を解除することを妥当なりと信ず。」という決議をして更にそれに備える準備手段を添えて政府に進言した。当時日本工業倶楽部其他の経済団体もほぼ同様の意向であった。浜口内閣は準備政策を行いながら昭和四年十一月二十一日に

至り同五年一月一日をもって金輸出を解除する省令を公布した。

しかるにその時は折悪しく米国に起つた昭和四年秋の大恐慌の影響が全世界に燃え拡がりつつあつたのである。

米国の不況により日本の主要輸出品生糸の輸出は激減し、銀塊相場の惨落により対中国輸出は減少し、一般輸出は昭和五年は三一%昭和六年は四六%減少した。そして生糸価格は昭和四年の最高値一、四〇〇円から同年末には一、一八〇円となり、五年十月には五〇〇円台に惨落した。繭価の下落も伴つて、農村の収入減は二億五千万円と推算された。米国不況のしわよせは多く養蚕家にかつたのである。

加えて昭和五年は米の大豊作で、平年作を八百九十万石上回つた。そのため深川正米市場の米価は五年八月から六年一月の間に四二%暴落を示した。米の出廻り期、中小農家の打撃は一層大きくなった。米国の大恐慌のため日本の農村が大打撃を受けた上に、さらに大豊作のための米価急落によつて農村は二重に甚大な損害を蒙つたのである。

然るにこつした事情に基く不況と農村疲弊の原因を、政府反対党や経済界の一部においては、すべて金解禁に基くものとして非難し、遂に浜口首相が刺され、井上準之助蔵相が暗殺されるよくな不祥事が起つたのである。

私は金解禁の是非を研究し、その研究結果を発表し、また日本商工会議所の決議を行つた藤田謙一氏が東商及び日商の会頭としての任務を経済界のために忠実に勇敢に実行したために後日、

当時の政友会系の政治家によって苦しめられた事があると思う。

金融恐慌、米国より始まった世界恐慌、金解禁と打ち続く日本の金融界、経済界の動揺に伴う農村の疲弊は都市にも反射して、都市の中小商工業者の金融問題が重要となった。従って藤田会頭は東商を総動員して昭和四年六月の中小商工業金融当面の対策に関する建議を始めとして、特別融資案その他数種の建議案をもって政府に対して熱心な運動を継続した。

支那問題と満州事変 当時の対支問題は日本の経済上極めて重大であった。東商は慎重な調査研究を続けてきたが、済南事件以来支那の日貨排斥運動は激烈となり日支貿易は危機に瀕するありさまであった。昭和三年五月東京商工会議所は支那問題委員会を設け、日華実業協会、ハルピン居留民会(加藤明)、上海日本商工会議所、漢口日本商工会議所、大連商工会議所、安東商工会議所其他と連絡して対策を審議し、八月には関東、関西の各会議所、各実業団体、各関係会社を会同して対支問題懇談会を開いた。然るに情勢はいよいよ險悪を加えたために、東商の支那問題委員会は昭和三年五月初め審議の結果、対支和平勧告、条約尊重、対支外交方針、支那関税問題の四項に亘る意見を決定し、これを五月十七、十八の両日東商で開催した支那問題連合協議会に提出してその貫徹に努めた。

この連合協議会は、日華実業協会、日本商工会議所、日本経済連盟、大日本紡績連合会の協同主催の下に、二一商工会議所及び七経済団体の関係者七三名が参加して、藤田謙一東商会頭を議長として審議された大会議である。現地側代表、ハルピン会議所加藤、長春和登、奉天庵谷、野

添、上田、大連佐藤、篠崎、青島島津、京城渡辺の九氏より詳細なる実情報告を聞いた後、慎重審議の結果二つの決議を採択した。一つは支那問題の決議で、東商の意見に多少の修正を加えたものであり、他の一つは滿蒙に関するものであったが、諸般の情勢を考慮して発表しないこととされた。

かように経済界の支那に対する和平期待の熱誠な希望があつたにも拘らず、排日の拡大と滿州における日支両軍の衝突、上海事変は遂に日支両国の鬭争を更に拡大せしめるに至つた。

日本商工会議所の組織拡充 昭和二年四月四日政府は新たな商工会議所法を公布してその機能と組織の拡大を図ろうとした。然るにその二週間後に台湾銀行の休業をさきがけとし金融恐慌が全国的に拡大し、続いて米国の大恐慌と、金解禁の重なつた世界的不況は農村を疲弊せしめ、ひいては都市の中小工業の金融対策の重要性が認められた。これらの経過はすべて商工会議所の活動の拡大と機能の強化を必要とするようになった。即ち藤田謙一氏は日本の経済界の動乱の最もはげしい時代に東商の会頭を引受けたのであるが、この困難が却つて全国の商工会議所が藤田氏を中心として組織を拡大することに協力する機運を作つたものと思われる。そして藤田氏の分裂せる東商の事務局と議員間の派閥を統一する熱意と、公務に対する公正なる態度と、愛嬌ある人格が見事東商を統制することができたように、この藤田氏の性格ゆえにやがて六大都市の會議所の融合、そして日本商工会議所が法的に組織されるや初代会頭としての重任を托されるようになったものと思う。支那問題に関して日商のみならず、国内及び支那、滿州の経済団体を網羅して、

重要な意見、忌憚なき方針を示した如きは立派な外交的見識を持った人と言わなければならぬ。

日商とILOの関係 藤田氏の大きな功績の一つは日本商工会議所とジュネーブの国際労働機関との関係を付けたことである。藤田氏はジュネーブのILOに日本の使用者代表を送る選定権を日本商工会議所が持つようにする準備をしていた。使用者代表には顧問随員が付くのであるが、藤田氏は先ず早稲田大学の教授宮島綱男氏を日商の顧問に依嘱し、使用者代表がジュネーブへ行く場合に顧問の役目をして貰うことにした。宮島氏は英仏独の語学に通じ会話も自由であり容易に得難き学者であった。(昭和八年内務大臣潮恵之輔氏から依嘱されて私が日本の使用者代表としてジュネーブに行った際もジュネーブに常駐する宮島綱男氏が顧問として一切世話をしてくれた。潮氏が此時私を選んだのは、リットン卿の一行が満州事変の調査のため日本に来た直後であったためであろう。しかしジュネーブでは支那代表も各国代表も一言も満州問題に触れる者はなかった。)

藤田氏は先づ自ら使用者代表として顧問宮島綱男氏を伴ってジュネーブの会議に列席した。そして日本に帰国後当時のILOの事務総長フランス人のアルペール・トーマ、その他数名を東商主催で東京に招待した。場所は新橋の料亭で日本の踊りなどを見せたが、宴たけなわにして藤田会頭が来賓諸氏と互に嬉々として盛んに談笑する有様を見て、吾々多少外国語の通じる者よりもはるかに歓待の妙を得ておることに感服した。これは藤田氏の誠意と恬淡な性格がしからしめたのであろう。藤田氏に次いで次年度から金光庸夫氏渡辺鍊藏其他数名が日商から選ばれてジュネ

ープの国際労働会議の日本の使用者代表として派遣されたことは、藤田謙一氏があらかじめ宮島綱男氏の如き得難き適任者を常任顧問として用意し、まず自ら代表としてジュネーブに赴き、ILO事務局と親交を結び、次いでILO事務局の首脳部を東京に招いて歓待して親交を重ねる等、準備と外交に藤田氏独特の手腕を示した結果であると思う。日本商工会議所は藤田氏の努力と手腕によって国際的にも重きをなすに至ったのである。

余談ではあるが昭和八年私が使用者代表としてジュネーブに出発する前、労働者代表の坂本君と政府代表の赤木君を誘って共に伊勢神宮に参拝することを提案した。両者快諾して神宮に参拝し五十鈴川のほとりで三人記念撮影をしたことがある。現代の人には想像も出来ないことであろう。今や思想も教育も言論も、政治も、人情も、公德もすべてが頹廢している。情けないことである。

努力をして不遇に終った藤田氏 藤田氏は混乱時代の東商の会頭となつて、見事に事務局と会議所議員を融合した。後に政財界に重きをなした金光庸夫氏や堤康次郎氏も藤田氏時代の東商議員であり、藤田氏の股肱として常に協力していた。藤田氏は東商前会頭藤山雷太氏の子息藤山愛一郎氏を重用した。副会頭の選任にも意を用い常に適者を選び、会議所議員の全能力をフルに用ゐることに努めた。そして金融、経済界の難局に処して巧みに六大都市及び日商傘下の商工会議所を統制して充分にその努力を発揮せしめた。殊に支那問題の紛糾に際して全国及び海外にある日本人経済団体の期待に添い、すべてのこれらの団体を東商に糾合して、経済、政治、外交に亘

って、熱心なる調査研究を遂げ、政府の行動に対して有力な指針を提供した功績は大きい。

更に新商工会議所法に基づいて有力なる日本商工会議所を組織して、商工行政の機能を円滑にし、特に日商とILOの連絡を創始し、世界的労働問題に関する、日本経済界の参加、発言の途を開いた功績は偉大である。

然るに晩年勲章事件なるものに座して失脚せしめられることはいかにも無残である。藤田氏が勲三等を与えられたことは関係官僚への贈賄のためと言われた。私は藤田氏よりその官僚への私信を見せられたが、歳末に平素の交友に基いての挨拶である。殊に東商及び日商の会頭として日本の経済界との連絡を図る立場にある者としては当然とも言えることである。私は金解禁の問題等に関して藤田氏が純理の立場を堅持して、一部の政党人より怨みを買ったためではないかと想像する。現代は財界人でも勲一等を授けられる者が多い。藤田謙一氏は東商及び日商の会頭として日本未曾有の経済の大混話時期に政府を助けて活躍し、かつまた日商もILOを結び付けて国際的功績を現わしたものであるから、現在なら財界随一の功労者として勲一等を授けられねばならぬ人である。然るに勲三等にけちを付けて失脚せしめられたことは、私はよくある政争の禍であると思う。

第六章

I L O (国際労働機関) 日本代表として

1、ILO総会

昭和三年五月三十日、第十一回国際労働機関総会は参加国四十六ヶ国の政府代表、使用者代表、労働者代表を集めてジュネーブで開かれた。日本からは政府代表に内務省社会労働部長河原田稼吉、国際労働機関帝国事務所長笠間泉雄、使用者側代表に日本商工会議所会頭、東京商工会議所会頭、貴族院議員藤田謙一、労働側代表委員に日本海員組合庶務部長米窪満亮とそれぞれの顧問たちが出席した。案件は一、最低賃金決定機関設定の件、一、産業災害防止の件、但し鉄道連結機による災害を含むの二件だった。

ここで藤田氏は次の役員に当選した。

一、委員会

イ、最低賃金委員会正委員

ロ、議事規則改正委員会正委員

ハ、詮衡委員会副委員

ニ、一般災害予防委員会副委員

二、使用者側団体役員会副議長

三、国際労働機関理事会副理事

この役員のうち、とくに第三番目について、「自慢がましいけれども、国際労働機関理事會副理事に当選したことは国際労働會議上、八大重要産業国（独、英、仏、白耳義、加奈陀、伊太利、印度、日本）と称せられている我国使用者側の面目を大いに發揚したものである。従来余りに日本が輕視されていたので、自分は大いに主張して、左の条件の下に副理事の地位を得たのである。」と書き、次期の選挙において日本使用者代表を理事にする確約を得ていた。

最低賃金委員会で藤田はこの制度に反対して次の如き發言をした。

藤田は日本の産業界はなお家内工業的手工業が大きな分野を占めており、それは剰余労働力の吸収と農村の疲弊救済、貧民の家計補助に絶対必要である。もし最低賃金制度を施行するならばこの家内工業が衰退し、国民授産の道を失なわせ失業者増大となる。

日本には工場法、府県工場取締規則があつて労働者は保護され、家庭工業においても徒弟契約、のれん分け、独立後援等で待遇され、副業、内職賃金も低くない。最低賃金制の施行は生産費を高め、工業の發展を阻害する。賃金の決定は第三者が干与すべきでなく労資で決定すべきものである、と反対した。

しかし、結局、適用範圍を主として家内労働にし、工場労働者に及ぼすことは各国政府に任ずといふ条約案と婦人労働への特別配慮、最低賃金制度実施の際の必要措置などをこめた勧告が採択された。条約案は賛成七十六票、反対二十一票、勧告は賛成八十一票、反対十八票である。

産業災害防止問題がILO總會に上がったのは六年前の大正十二年、第五回總會でカナダ代表から

提案された案が決議されたことによる。回国代表は以来継続して出席していた。藤田はこういう外国の任期の長さのメリットを認めていた。議案内容は一般災害と船舶災害と鉄道自動連結器の三問題に分かれているが第三の問題は日本が四年前から採用して人身事故を減らしたといふので鼻高々だった。自動連結器への切替に欧州の大国は、経済上影響するところが大であるから待ってくれとか、国情が違ふと悲鳴を發し、従来日本がいじめられて来た逆手を行かれたのは全く痛快だったと、溜飲を下げていた。

藤田は六月十一日の総会で演説をした。これは画期的なことだった。従来の日本代表は所謂沈黙主義で、沈香も焚かず屁も垂れずであった。藤田はILO総会が欧州のみの会議たる傾きがあり、東洋諸国が軽視されがちであるところから自分の胸にとどこおっていた憤懣がついに一矢を報いたくなつたと告白している。日本を代表した赤心がほぐれて一片の毒舌と化した。

「議長、諸君!!

第十一回国際労働總會日本使用者代表として、労働事務局長アルベール・トーマ氏の事務報告に關連し、茲に一言申し述ぶるは私の最も欣幸且光榮とする所であります。

私は此労働總會に出席するのは、今回が初めてであるが、今や深遠なる人道意義を有する此一大總會が實際によく活動しつつある状態を目撃して、實に感激に堪えず、一言以て其の前途を祝福するを禁じ得ないのであります。

今局長の報告書（昭和三年度分は仏文四九一頁、英文四六七頁）を一読するに、労働事務局は国際

労働機関の根本目的達成のために不断の努力を払われ、その結果最近各国に於ける経済界の不振にかかわらず、着々相当の成績を挙げつつあるを承知し、局長をはじめ局員各位一同に対し、深く敬意を表するのであります。

私は労働事務局が殊に労資間における合理的協調の実をあげんがために、科学的方法の研究に全力を尽くしつつあることを承知して、一層欣快に存ずる次第であります。今回議案の一つとして、目下盛に討究されつつある産業災害防止問題の如きは、正しく前述研究の一産物であつて、即ち産業の発達を固く人道的基礎の上に求めんとするものにして、かかる人道に基く企業が総会に提出されたのは大に慶賀しなければならぬと存じます。此災害予防案に関して、私は多少同意し得ざる点もありますが、大体において之を支持するに吝かならざるものであります。

以上は国際労働事務局乃至国際労働機関について、其半面を申述べたのでありますが、もし幸にして議長の御許しあらば、私はさらに他の半面に関し、いささか所感を述べてみたいと存じます。

さて労働事務局なり国際労働機関そのものなりが、一つ大なる誤りに陥っている点があります。即ち労働問題又は一般産業の問題を取扱うに当り、あるいは単に一般抽象論に流れ、あるいは単に欧州問題にのみ特有の事情を材料として、全人類の問題を画一的に解決せんとするものの如くであるが、これ実に大なる誤謬といわなければなりません。いやしくも斯る重大なる問題を世界的に解決せんがためには、単に欧州のみならず、凡ゆる締盟諸国の地理的、歴史的、及び社会的要素を考慮に入ることが肝要である。然るに此労働総会は第一回より今日に至るまで、殆んど毎回主として欧州諸国に

関する問題を取扱い又は如何なる問題も主として、欧州諸国に特有の材料を根拠として論議した様である。もし国際労働機関にして、かかる偏狭の態度を改めずんば、漸次本来の性質を失い、遂には名実相伴わざるに至ること明白であります。

もし完全に労働問題を解決し、以て全世界に亘り真に『産業の平和』を確立せんと欲すれば、ベルサイユ平和条約第四百五条に規定するが如く、たまたま国際会議の中心地たる欧州諸国のみならず遠く散在する凡ゆる締盟諸国の風土、人情並に経済的及び社会的情況等を充分商量しなければなりません。然らざれば如何なる条約案も将た又勧告も遺憾ながら恐らく永久に空文たるに過ぎないのであります。」

「諸君、私は特に此の機会に於て我日本の立場について一言したいと存じます。御承知の如く、我国は東洋に孤在して、特権の歴史を有し、固有の文化を持ち、なお独特の伝統を持っているのであります。併しながら我日本は斯かる固有の歴史と文化を持っているからとて、世界の大勢に相和することなく、常に局外主義を固執するものでありません。

事實は全く之に反し、過去数世紀に亘って固く根ざした風習制度より、一躍、而かも固有文化の美点を維持しながら、近代の世界的文化制度を採り入れ、よく之を咀嚼したる我日本の如きは、恐らく世界にその類例を見ることが出来ないと存じます。これ即ち我日本の国性を証して余りあるものと信じます。

我日本の事情、凡そ斯くの如きであり、又同時に国際会議の中心を相距る遠き国々は何れも、皆特

殊の事情を有しながら、而かもなお世界の大大勢に相和し、以て世的平和の爲めに協力せんことを辞せざるものであらうから、此国際労働機関たるものは、此点に留意し、国の遠近を問わず、各国の文化並に社会的事情を直接の方法によつて研究することが肝要であります。今や国際労働事務局は、アジア諸国における労働事情の調査研究に着手されたることを承り、欣慶に堪えざる次第であります。然しながら物事を遠方より間接的に観察することより生ずる誤謬を避けられんことを切望して已まないのであります。苟くも一国の労働問題を研究せんには、その根底をなすべき其国の社会組織を併せ研究せざるべからざること勿論であります。

終りに臨んで、私は国際労働事務局が、我東洋諸国に対し、不断の注意を払われ、殊に各其の国情を尊重されんことを、衷心切望する次第であります。而してその東洋には全人類の福祉、世界の平和を樹立せんには、必ずや一柱石が据えられなければならんと確信致します。希くは此国際労働機関が各締盟国の政府、使用者及び労働代表、是等三者の和衷協同に依り、国際機関たる眞の機能を發揮せんことを。」

藤田はこの会議の体験から、国際場裡では理のあるところを敢然と発言しなければ疎んぜられてしまふ。むしろ駄々をこねた方が効果が大きいといい、この結果、日本は理事国となり、労働事務局長が日本を訪問するという成果をうんだといい、会議中「日本のフジタの耳に入れておかなければ……」といった調子でいろいろ相談をかけられた。

六月十三日の総会でカナダの使用者代表キアンブ氏提出の「生産減少の各種原因の絶滅又は減少に

関する」及び「使用者、被傭者間の協同精神發達に関する」二決議に対し、自分は賛成演説を試みたが、右提案それ自体誠に適切であるのみならず、加奈陀の如き国とは将来その他の問題に関して提携するの便なるを思つたからだった。

藤田は六月十六日の閉会式に使用者側の代表として閉会の辞を述べたが日本人としては最初だった。この国際会議では結論は「日本人が三千年来守り来た正義や人道と外国人の唱えるそれとはかなりの距離がある。唯現実は呆れ果てたる我利我利亡者の集合にしか過ぎない。我国が更に〳〵実力を増加して、日本の意見即世界の意見となり得るような時機の来るまで、一意専心己を守る外はあるまい。」国際間の現状を三思すれば内に於て抗争など起すべき秋にあらず、況んや国外に於てをやとの信念が残るばかりである。」

藤田はILO総会終了後、フランス、イギリス、イタリア、ベルギー、オランダ、ハンガリー、南ドイツを歴訪してそれぞれの觀察記録、感想を書いた。

2、「訪欧餘録」の国際観

昭和三年の藤田は多忙の身であった。懸案の商工會議所法が実施されて日本商工會議所、東京商工會議所会頭として新法活用 of 責任を負い、また前年の昭和二年に発生した金融恐慌への対策も急を要し、さらに大札記念国産振興博覧会の会長としても多忙だった。そこへ国際労働會議の日本使用者代

表に選ばれた。そして四月二十五日、スイスのジュネーブへ出発かたがた欧州各国の経済、産業、社会状態を視察し、往復シベリヤ鉄道を利用し、八月二十五日、百二十日余の旅を終えて帰国した。その旅の感想をまとめて昭和四年七月一日、非売品ながら広く江湖の批判を受けるとしてB5版二一七頁の見聞記「訪欧餘録」を出版した。

まず満州で感じたことは中国勢力の抬頭と日本人の衰微ぶりの好対称であった。日本人の消極性は満鉄の線路幅が四フィート八インチ半で中国の東支鉄道が五フィートの広軌であることにもうかがわれるとし、そのため北満の特産物がウラジオにとられている。また日本の勢力圏は満鉄に限られていると慨いた。

ソ連に対する見方は厳しく、共産主義が理論通りに進んでいないことを見抜き、「列車すら白樺を焚いてトボトボ走る」と悲観的で民衆については、「老若男女の顔は無智ながらも平和そのものである。共産主義の美味に釣られて未だその有毒を解しないお目出度い神様の顔でもある。レーニンの奴飛んでもない罪を作ったもの……。」と書いた。

ウラル山麓のスベルドロヴスクについた時ここでツァー一家が抹殺されたことを思い「あれを思い、これをもって感慨無量、鬼哭愁々と身に迫った。思わず知らず東の方を伏し拝み、我皇位の萬々歳を祝し奉った。」

レーニン廟の存在から「宗教を破壊した革命政府も、その守本尊としてレーニンを偶像化せんとするのは矢張り革命党も人間で従来の人類が踏み来った径路とその素質に於ては何等の変化がない事に

気が付く。」

またモスクワの遜逸仙大学からロシアが他国にむかって赤化の宣伝をなすのは既定の事実とみるが、しかし「案ずるを止めよ。一国の革命にはそれ相当の根強い原因がある」とし、一国の政治が合理的に動き、政策が公平を失せぬ限り大丈夫だとする。

誕生間もないソビエト連邦を見ての結論は人を眩惑せしめるほど民衆の利益を叫ぶ共産主義者も云う事と為す事には矛盾が多い。真に最大多数の幸福の実現をはかるには孤立せず世界各国と協同し、ことに日本との間に思想上ではなく経済的な淡泊な水魚の交わりをすべきだという。

とかく日本人は明治期の成功者は全面的に賞讃するが藤田ら大正の成功者には深く調査研究することなく「成金」と軽蔑的レッテルを張る。しかしそれは既成支配者の新参者への怖れであり、なお残る旧武士的徳目思想の産物であることが多い。藤田謙一の「訪欧餘録」を読むとその鋭い洞察力とヨーロッパ各国への理解の深さに感心する。次の例はたびたび亡国の苦しみをなめたポーランドについてである。

「波蘭は十世紀初の建国で其後幾多の波瀾を重ねた末、一七七二年より一七九五年までに露、奥、普三国のために分割せられ、志士コシューシコ等の千辛万苦も効なく滅亡に帰したが、世界大戦の結果又独立国として復興した。

コシューシコが時たま／＼米国の独立戦争（一七七五―八一）に際し、仏蘭西のラファイエット等と共に米国を援助したこともあつたが、それからヴェルサイユ条約とウィルソン更にウィルソンの民

族自決主義、民族自決とポーランドの独立、回想の糸は次から次へと繰り出される。コシューシコは不幸にして直接祖国の救出には失敗したが、百二十余年を隔てて、その事業の完成を見た。政治の運用、事業の経営、万般の事皆人にある。

米国の独立戦争には仏、西両国は共同出兵したり、仏国は資金を貸したりした事が流石の英国をして一七八三年の独立容認とまで至らしめた経過であって、今日仏国が対米戦債解決問題に際して、米国民に訴うる所以もうなづけるし、昨年十五銀行の救済問題に対し、とくにその整理条件が他の銀行に比して寛容であった事を是認する根拠として、同行の設立は西南の役に対する軍資金供給の任務を以って生まれたのが、その濫觴なればなりと云う有力な見解が行われた如きも同工異曲の過程であろう。

明治人は小国の運命やアメリカ独立に非常に関心をもちよく勉強した。明治の日本は小国であり国際社会における真の独立が最大課題であった。藤田謙一の教養にもその特徴が見られる。

ベルリンでも大分見物を行ったがその観察眼はさすがである。

「西洋の銅像は単に銅像主の塑刻に力を注ぐ許りでなく、之を光らしめるために、或は家隸とか友人とか、研究物を現わすとか、種々の附加物を按配して総合配置の妙を描出している。それで銅像は何時まで眺めても厭が来ない。之は定めし金のかかる事であろうが、銅像は飽くまでも記念表敬の美術品である以上、我が国でも義理づくめで作るとか、無暗に手を抜いたものをつくるような事は今後真つ平だどつくづく感じさせられた。」

「名門旧跡の保存、風景の保勝も大切ではあるが同時に新時代にはその時代にふさわしい、然かも利益を伴うような新工夫が肝要と思う。」

「伯林の市街は放射形に建設されている。到る所の道路がよく舗装され、所々の放射線集中地（プラッツと称す）を広くとって、ここに庭園設備を施すあたり、電気仕掛の信号一つで巧みに煩雑なる交通が整理されている点、建造物、下水等の完備等は都市管理者の範とするに足るだろう。」

この後五十頁から七十頁にかけて独逸観を展開しているがさすがその産業分析が鋭く、第一次世界大戦がドイツとイギリスの対決によっておこらざるを得ないゆえんを説き、さらに戦後の混乱、インフレーション、賠償問題にペンをすすめている。そして「自分の見た儘ま、聞いた儘の觀察によれば、昔日の如き世界征服の如き大外れた計画を樹立するような黄金時代は来らずとするも、ゲルマン民族自体の幸福を、各国民程度に引き上ぐる程度の復興ならば、最近の統計に徴しても、早晚到達し得べき充分なる可能性を觀取される。」と敗戦、インフレ、貧困、風俗頹廢と暗い状況の続く中に確かなドイツの未来を見抜いている。

藤田のドイツ工業分析の中で胸をつかれるのは化学工業の項である。ここで人造絹糸と空中窒素の固定法について説明するが、その末尾にフト次の慨きが出た。

「之等工業にしても世界独歩の地位を占める染料製造にしても独逸が何れも先駆者である所は、流石に化学王国で、そこに力強い復興の原動力も窺われる。自分の畏友金子直吉氏は夙に之に着眼して幾多の犠牲を忍んでその事業を完成して功酬いられず。我等の既往を顧み、また独逸の現状を目前に見

て思わず不覚の涙線を刺戟するものがある。」

このくだりは合理主義に徹して情を欠くと見られていた藤田の本当の姿を伝えるものといえよう。

金子直吉は政商、投機商人、死の商人などいろいろなレッテルをはられ、米騒動の時の悪役にされるが開国日本にふさわしい自分の才能を信じて行動した風雲児である。開港場神戸の生んだ梟雄ともいえよう。化学工業への先物買いの関心は彼の投機的な性格からといわれるが私は開港場の性格といった方が真実をつくと思う。金子は米沢高等工業の化学教師秦逸三の研究を土台として技術開発を行ない、日本で最初の人絹事業に手を染めた。かくして帝国人絹株式会社が設立された。帝人への思いはのちに帝人事件をひきおこすほどである。またドイツの空中窒素固定法を大戦後にさっそく導入して高压式のクロード法による人造肥料工場も建設した。のちの東洋高压である。金子の化学工業への執念は、鈴木商店の破綻後、その再建策を石炭液化化による石油生産の実現に託したことからも知られる。

昭和十九年、日本の敗戦の色濃いとき、一代の梟商金子直吉は、終生、住宅さえも持たず杜宅ぐらしをつづけたまま、およそせいたくというものを知ることなく、事業の鬼としてその生を終えた。時に春浅い二月二十六日。行年七十九歳であった。藤田は遅れること二年昭和二十一年三月に世を去つたのである。ドイツでの涙はこの金子の運命に対する暗澹たる思いだったのであろう。

フランスではその芸術を評価するが、しかし何より金融、経済の底力に感心している。フランス人の頑張りや第一次世界大戦の勇戦敢闘でも証明されたとした。だがもはや戦争には勝者、敗者ともに

損害だけ残るとし、フランスもドイツもオーストリアもイギリスすらも「少くとも今の戦争経験者の生存する限りもはや戦争にこりこりだと言うに相違ない」とみている。

ただフランスでは恐独病が一向に取りそうもなく、欧州全体の軍備は大戦前より20%も増加しておりアメリカ前大統領クーリッジがいうように「欧州を救うものは軍備の縮小のみ」という意見に賛成している。そして「仏独ともに人類の為に敵愾心を捨てよ。自分はこの文化の国民をして真に復興の大業を完成せしむるの道は自ら闘争の渦中に陥る事を熄め平和の途に率先するにあると信ずる。」とまとめた。

イギリスについてはその大国としての風俗、伝統などに感嘆しており、週休制、家庭サービスぶりなどにも学ばねばならぬというが、しかし明日の英国工業はどうであろうかという自らの設問については否定的である。

藤田はさすが経済分析が鋭く、イギリスの未来図もその資料の上で描いた。大戦後の七年間にイギリスの企業の利潤率は石炭、製鉄業において欠損の方が多く、機械工業、綿工業、羊毛工業、造船業はすべて低下し、わずかに新興の電力、化学、石鹼業界において向上をみるだけである。また賃金は高く、工場も老朽施設を更新していない。「一般的に老大国の感がし、何となく凋落の影に鎖されている」とみた。

そして英国の自由貿易論は偽瞞でありそれは英連邦各国、植民地の犠牲の上であり、他国には排他的で、そのため世界各国はカルテル、シンジケートを結成しており、自由貿易主義は崩壊の運命にあ

るとした。

この度の欧州旅行で藤田がもつとも高い評価をしたのはイタリアのムツソリーニに対してである。またゼノアの町ではコロンブスに非常に感動している。ここで藤田は世間で有名なアメリカ発見苦心譚よりも、その実現に東奔西走していた頃のコロンブスがわれ／＼の教訓になると教えた。その記述は「一四九二年八月三日、金曜日、午前八時、パロスの港に三隻の帆船が出発、コロンブスは既に六十歳をこえていた。既に妻を失い」と極めて情緒的である。

ムツソリーニについて高く評価したが「しかしながらイタリーなるが故にムツソリーニが現われたのだ。然して今や彼の反動政治は所謂反動ではなく、世界政治の一傾向を画するに至ったが、さてそれを多難なる我国にそのまま移植する段になると考えるべき点多々ある」と慎重である。国情を無視してはレーニンもムツソリーニも均しく危険思想だという。それでも最後に一言「ムツソリーニに似て非なる和製ムツソリーニの出現が混乱した日本を救う一つの方途とも考えられる……。」と謎めかしている真意は何だろう。

藤田はこの旅で愛国者となった。まず国号を欧米ではジャパン、ジャポン、ヤパンというがニッポンを正式名としなければいけない。また天皇はキングでもエンペラーでもカイザーでもツアーでもない、テンノーとして押し通すべきだといひ、之まで外国を買い冠り過ぎたと反省する。

さらに愛郷心にも燃え、ロンドンの大英博物館の津軽のことを記したイエズス会宣教師書翰を紹介している。これは津軽出身の某君が図書館で工業史の調査中、偶然に発見したのだが、彼とローマで

あつて話を聞き、ロンドンで確認したのだった。面白い記録だから書いて見る。

「都より北方三十日路ばかり隔たるところの太守タイガラン殿の御會司ジョン・ボングイと呼び申候公達が聖なる洗札の御儀に跪き候へしは数日前に御座候、タイガラン殿は「松前島」と通称する島に棲む韃靼人の一派とか称せらるる蝦夷と呼ぶ住民と交易を有する日本最北の太守に有之、蝦夷地はツガラ半島より十七、八里先の海上に位する由に御座候。交易と申すは、魚類、獸皮、日本人の食用たるべき海藻等はその島の産物に候て、日本人は衣服材料、武器、其他雜貨を供給するとか。また韃靼人は行動粗野、褐色の皮膚、毛髮長く、鬚が濃く、農耕を怠り、専ら狩魚のみにて生活致し居るよう及聞候、ツガラ地方は白にまれ、黒にまれ、よき葡萄を多量に産出し候て至るところに野生すとは驚き入り候。のみならずボングイ殿には後日持参する旨口約仕り候」

ここで藤田は懐かしさとまたヨーロッパ人の勇猛精神を尊敬している。この本の末尾に猶太人ユダヤ人は謎だといながらもユダヤ人が世界征服運動を行なっており、フランス革命もアメリカ独立戦争も欧州大戦もその表われとし、世界の金融界、言論等もその手に歸し、デモクラシーもユダヤ運動だという。どういふ観点でこういう論旨になるか不明だが「何にしても日本には日本独自の精神が流れている。之はかえつて外国の亡者共に教えてやるべきことで、かかる精神にはぐくまれながらの外国かぶれ、思想かぶれは国を亡ぼすもとだと痛感して筆を」終えた。

